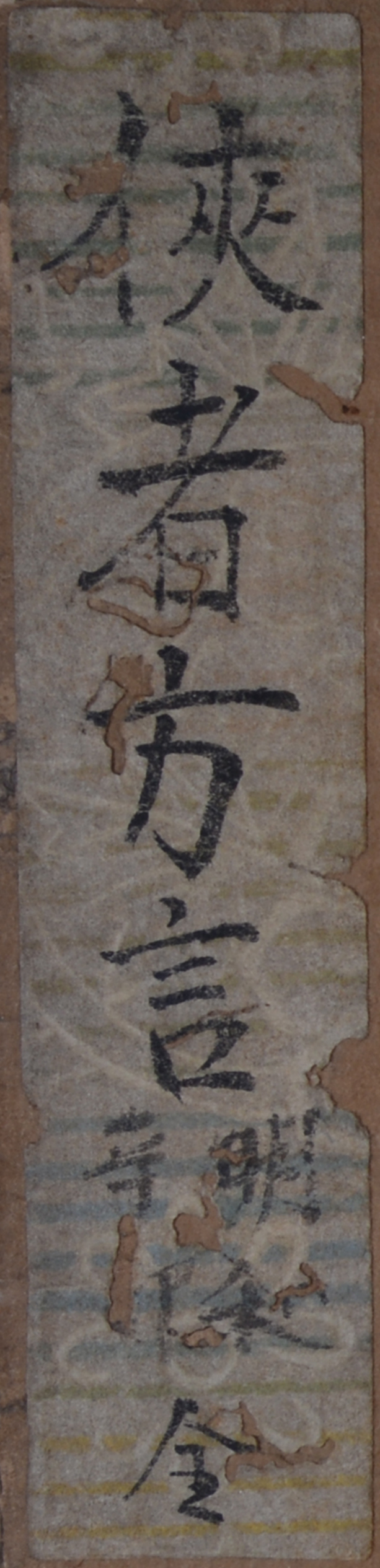


國語
8. A
2
24

L 80632

俠者方言叙、夫人性得所也、賢愚強弱不同且賢愚貴賤以人ノ貧者貴可論唯言能因テ其人ニ

可レ論二言語之彩一(
前遊子之
是準メ俠
者之
方言
怙令
同耳

亦
是準メ俠
者之
方言
恰今
同耳

歟
鳴呼遊
子俠
者徒

者
言形ヲ同
ジ共ニ廣
府之

異人可爲賞序

卯初夏

豐嶋

童

謹書





同孤
(

ふだ（つきべ）の名（な）は神田（ごうだ）多吉（たきち）年（とし）は廿（はたち）七八（ななやつ）の男（おとこ）ぶ
つ（ぶつ）ぬき（ぬき）の袷（あわせ）上（うわ）ケ（げ）藍（あい）さびの帷子（かたびら）に紅（こう）屋（や）のお
ん（おん）とろ（とろ）ん（ん）の幅（はば）の広（ひろ）き帯（おび）もまだ
結（ゆ）び（び）下（さげ）髪（がみ）の頭（あたま）は油（あぶら）気（け）薄（うすく）黄（き）小紋（こもん）の
風（ふう）呂（ろ）敷（しき）包（づつみ）を提（さげ）て来（き）たりけり
扨（さて）こそ此（この）男（おとこ）は彼（かの）お竹（たけ）が情夫（まおとこ）なるべし
と思（おも）ふ間（ま）もなく彼（かの）男（おとこ）は風（ふう）呂（ろ）敷（しき）包（づつみ）を
解（ほど）きて中（なか）より浴衣（ゆかた）を出（だ）して着（き）かへ
脱（ぬ）ぎたる衣類（いるい）を風（ふう）呂（ろ）敷（しき）に包（つつ）みて
男（おとこ）ぶりは好（よ）けれども何（なん）となく浅（あさ）ましき
様（さま）なり

おのやふのそは（ほ）まで
てきたなが
十
おきわアがうぶ中（そら）ゆつくり
今（ま）ふんぐ（ぐ）おのアな吾（のむ）や
入（い）くぐ（ぐ）ふ絵（ゑ）の秋（ふ）さ石のむ
ぎのふ（ふ）まる（ま）ものあ種（ま）
又（ま）来（き）ん（ん）ぐ（ぐ）ふ（ふ）書（か）たアちがふ（ふ）
白（しろ）くぐ（ぐ）ふ（ふ）ぐ（ぐ）ふ（ふ）
のいぶ（ぶ）まぶ（ぶ）
十

いうぐ（ぐ）ふ（ふ）ぐ（ぐ）ふ（ふ）
ぐ（ぐ）ふ（ふ）ぐ（ぐ）ふ（ふ）
ぐ（ぐ）ふ（ふ）ぐ（ぐ）ふ（ふ）
ぐ（ぐ）ふ（ふ）ぐ（ぐ）ふ（ふ）
ぐ（ぐ）ふ（ふ）ぐ（ぐ）ふ（ふ）
ぐ（ぐ）ふ（ふ）ぐ（ぐ）ふ（ふ）
ぐ（ぐ）ふ（ふ）ぐ（ぐ）ふ（ふ）
ぐ（ぐ）ふ（ふ）ぐ（ぐ）ふ（ふ）

てよくあの四へんぐるぐるまはつてゐるうちに其時分だんだんとやつてけるやうになるものだアもんだアなめてかゝつてもいつまでもいつまでもいつまで

のの文めがいつ迎てまつ姫ら蝉ア
いるぶろう大名屋の久米べい
いやこなやはぎ姫ぶ久米
狩なのそれぐらぶもろ十ヨてあのつぶ
姫るまぐそなのうぐ久米イシヤきはろろ十
おのやアでこのさげ下ら久米ミくサ
みろぶくい迎ぐ十そ
ぐめろみのよアぐ

きそぜんこのえがほをおらが向へ（ほとてきたとこゑるもんだぶつ
とゐまゐおらが向のぽつぽつ屋敷でおらがよめごをむかへてぽつ
ぽつそろそろおまへおらが大事あんぢやうだぶつ
めでたうあんぢやうだぶつ
げにぐわんぢつの太生人ぶつ

おもぶいせんくらいあるぞ。
してぞアそのぐんもやアそのぐんも
サアそうするとその其の頃のやアどのはらえ
そうおもうまもなくばきざ出で
けまもなくおいの新ぶん
なりくしもやくそのはいるとア。サア嘉門おろが
どけへ行くの今じぶやアまた船の
```
```

おあつらへ向きの座敷アリ
で茶釜(ちやがま)ぶつくらけな。ホウ
友(とも)の寄合(よりあひ)
親(おや)ぐんの呂(ろ)ぢ
○と二人(ふたり)ぐらゐなら
あつらへ向きの座敷アリ
ホウ。さりやアゆるりなさ
きやれ
久米(クメ)イアンナ
せんべ(ビスケツト)ポコレマア

ちへ来（き）てでうのんぐそ。モウ どこ
のうなぐさ。ぢさ。ぢさ。ぢ

○祖父(じゝ)のうまれ(ゝ)たまひ(ゝ)しは(ゝ)ア(ア)ラ(ラ)ありがたや(ゝ)。○父(とゝ)(ゝ)さま(ゝ)(ゝ)のうまれ(ゝ)たまひ(ゝ)しは(ゝ)ア(ア)ラ(ラ)ありがたや(ゝ)。○母(かゝ)(ゝ)さま(ゝ)(ゝ)のうまれ(ゝ)たまひ(ゝ)しは(ゝ)ア(ア)ラ(ラ)ありがたや(ゝ)。○我(わ)(ゝ)がうまれ(ゝ)たまひ(ゝ)しは(ゝ)ア(ア)ラ(ラ)ありがたや(ゝ)。○我(わ)(ゝ)がこ(ゝ)の

ねもんざ○ゑんと表のうえとそこ
釈なかま(仲間)ぢゃと思ふ内の今年十が如ー
ろう○ゑんざ面上(で)ーーー
くまもたなんへな扱ってくれ
釈なコホリヤアアイさそ
皆て
廿二番
○おやおやおやお

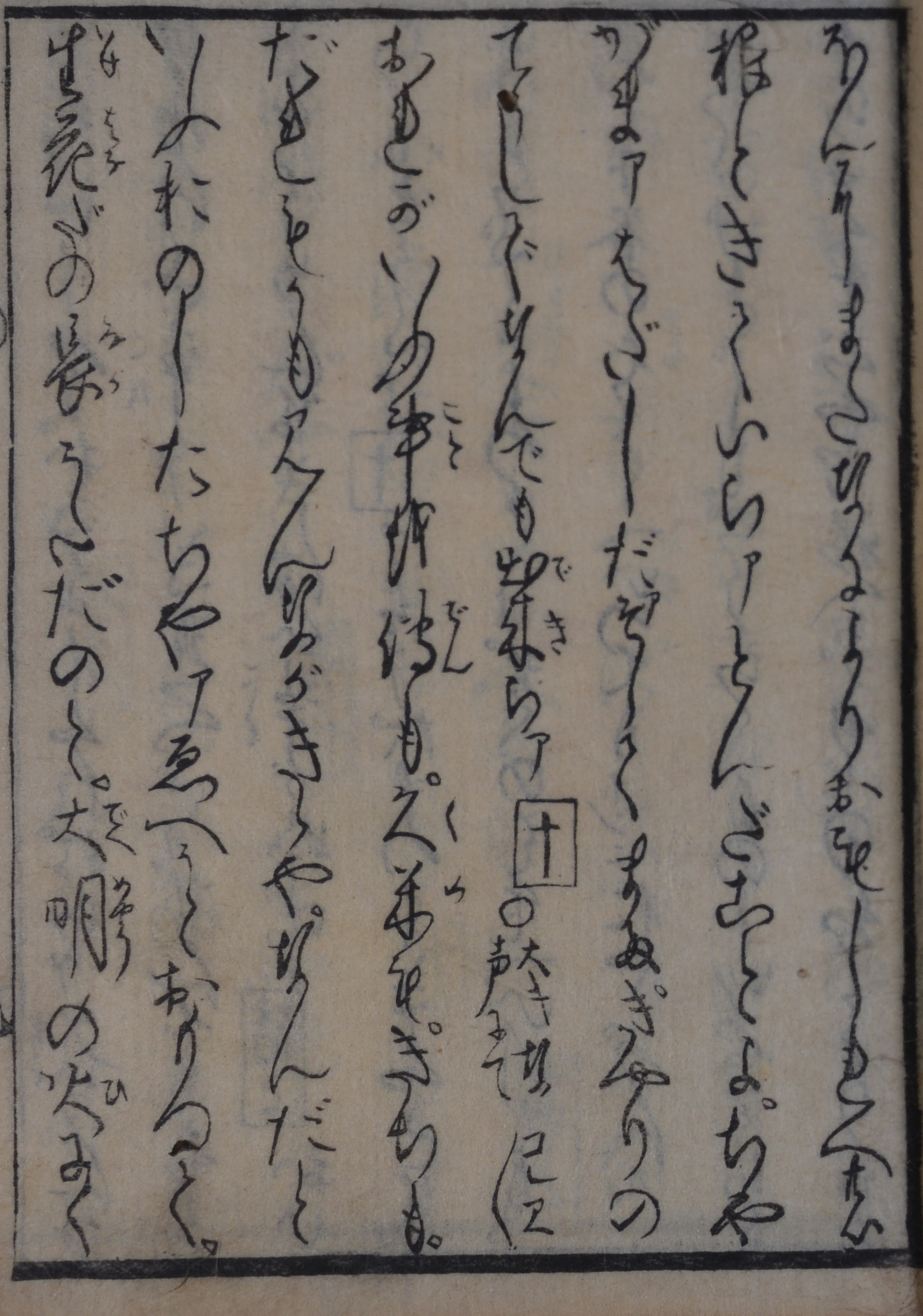
なさおあらうはんぢゃるがいっしょ
えんへん。おくさまやぶんのうち
しゃ　婦　ニテせんのこんぢゃもぢがきや
おめへもんぢゃこのの。ぬし居ない
ヨうくんぢゃもぢがきやこの。ぬし居ない
せへなと　婦　○そうしてあくる朝と　駕　サアモウ大
なまそうしてぢゃんまアだんぐまる大

訳ぐち

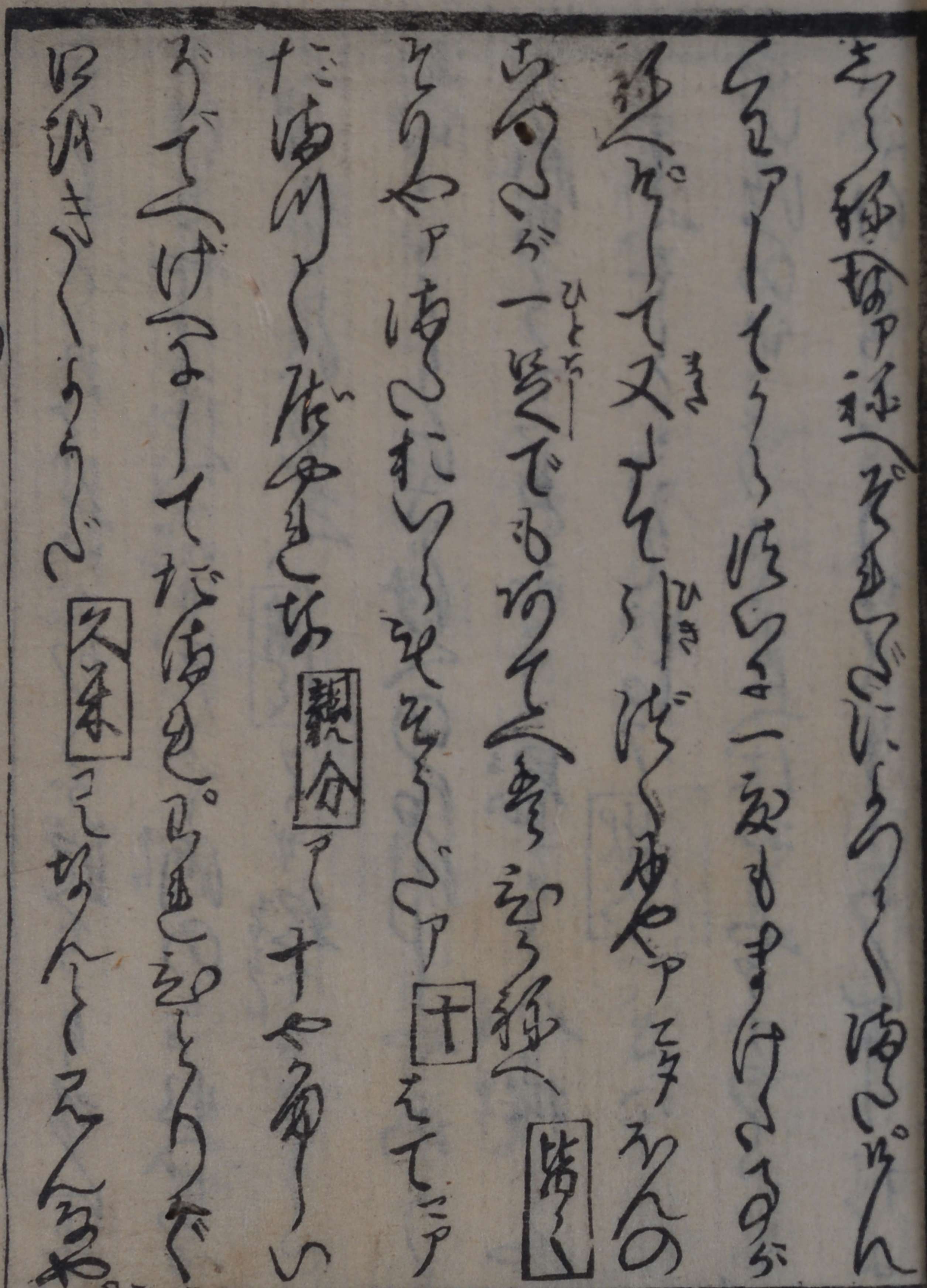
サアてい〳〵さん〳〵寄(よ)った〳〵寄(よ)った〳〵寄(よ)った

合ハぺてゑくのよふなもの
葛籠（つゞら）を上（あ）けへ（あ）くと
おもやぶんまりなんのうめくせう
しやばなぶんまりなんのうめくせう
ぢん次。大キな碑（ひ）
古 コレぺんなものゝうめくいりやアにぎ
ぺんなものゝうめくいりやアにぎ
ぺんなものゝうめくいりやアにぎ

しゃアがって入（い）れてくれねえ。
なんでもらアねえんだ。
おのれ大（でか）くなりゃアがって
こんな事（こと）をするがおのれのためだぞ。
よくおぼえておけ。
十一
いんまでもおらアこの細長（ほそなが）い帽子（ぼうし）をかぶって
おのれの眼（め）の黒（くろ）いうちは
おのれをつけ廻（まわ）すんだ。
おのれがおとなになって
嫁（よめ）をもらっても
おらアこの細長い帽子をかぶって
おのれの家（うち）へ



だんだんおそろしくなりまして又きた
ことをおもひだしてもぞつとします
ニ
ふたりはおそろしくなりましたので
十
ア
ふたりはおそろしくなりましたので
ア
ふたりはおそろしくなりましたので
ア
ふたりはおそろしくなりましたので



あらしふく
みねのもみぢ
ちるときは
おくやまべより
ぬさぞたちける

ちりそめて
もみぢのにしき
たちまちに
ふきおろすかぜ
ぬさとみえつつ

ちりまがふ
もみぢのにしき
たちまちに
ふきおろすかぜ
ぬさとみえつつ

ちりまがふ
もみぢのにしき
たちまちに
ふきおろすかぜ
ぬさとみえつつ

ぶんとて　第六
まくらがでるぜ〳〵そうくいちやうだ。
人ごみのあるくやうにぎやかなのはたのしみ
ものだ。
ゐ段
ゐ段
ゐ段

なるしかくそんなもの
おもひのほかおほきなが大
でんまいおほきなへコリヤアこ
ちらの石をさしあげ
ませうとおもつて
ゐるところへ
大ちがひだのそんなの
ではとてもだめだ
ほかのをもつてこい
といふからまたさがし
てゐるとまたいふ
ことがちがふ
にやどんなのがよいと
聞くとおほきくつて
しかもうすくつて
ひらたいのをもつてこ
いといふからまた
さがしてゐるとまた
ちがふ
(リウトヨニ)なるほど
(ほそながが大
(ヘコリヤアこ
(おもひのほか
(大ちがひ
(せさしあげ
(ませうと
(ゐるところへ
(だめだ
(ほかのをもつてこい
(さがし
(ちがふ
(にや
(聞く
(ひらたいのを
(いといふ
(さがし
(ちがふ
(の上ヲ

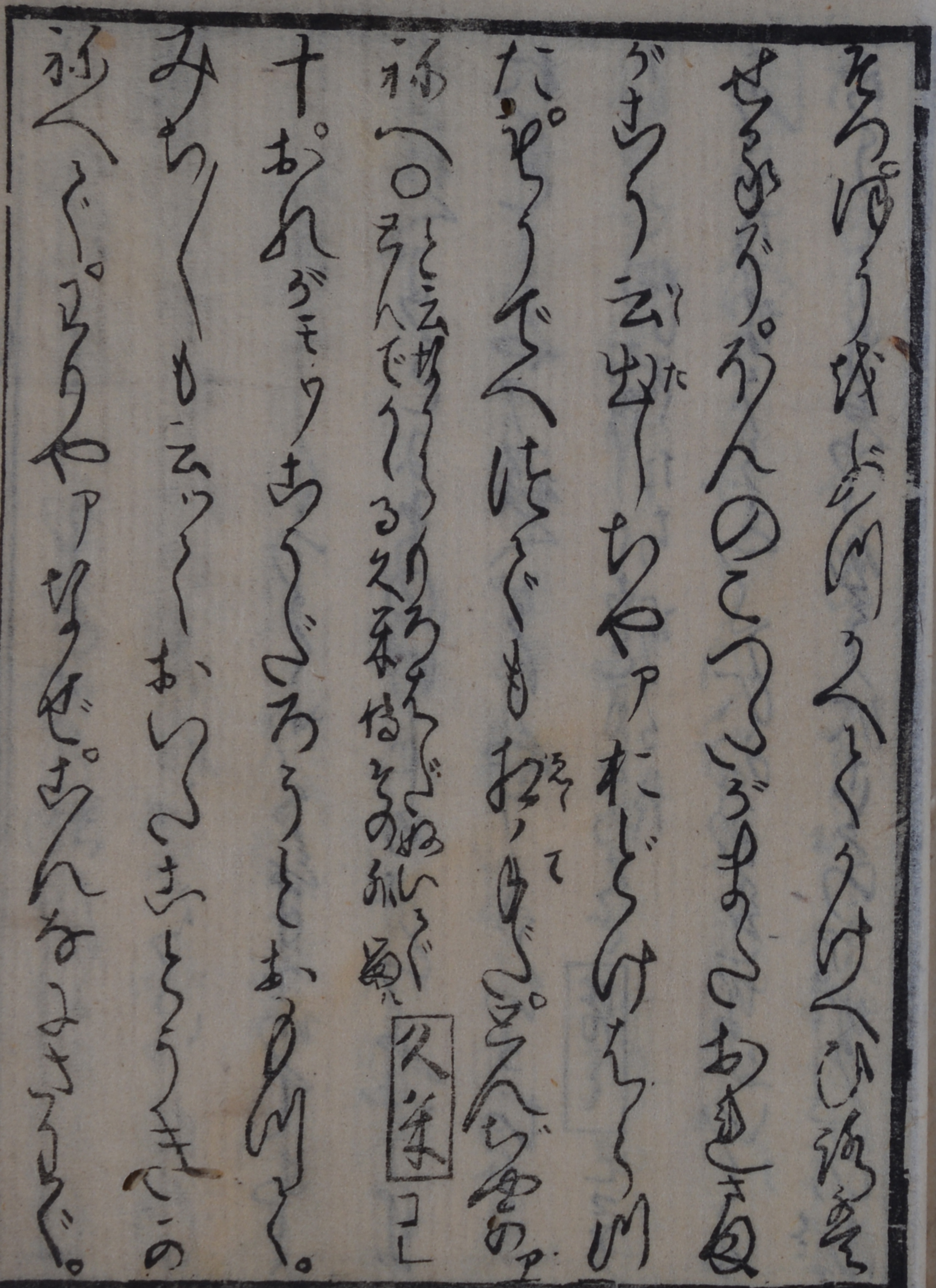
居
なんでもお石さまるそ
でさがすんだっぺ
やめるんだっぺ
どうしてもやめるんだっぺ
親分
うーん
せっかくここまできたんだっぺ。
このまま
なあ・おいさまるそ
さがすんだっぺ
どこまでも
居
ナ
ア
ろうぶ

十

○大きなお寺の門（ナントモ）おそろしくたかくアマリ
ひろくもなく（ナントモ）いえのようなもんだ
○たにがわをわたりて大勢の
人がとうりをとおる
○ちいさなこどもが
ぎょうぎよくならんでいる
○ちいさなこどもがおおぜいあつまりて

うんとこもやの有（ある）人のうち。
しだ。
人（ひと）さまざまに（海さんなさろ
ホニ二なり（のよさそ
ぎにおもりまうなり（コレエ
わるもの（ア十。
大（おお）きなり（ア十。
ぶんなり（ア十。

くたてまつりぬ。アヂ
爺ぢゞアぢゞア
とゝさまぢゞアも
が亡きあとぢゞアさまは
さ淋しくなるであらう
の後まぢゞアさまは
ぢゞアさまの云ふ事を
くよくよしてゐやアせぬ
ぬうちにアヂ
ぢゞアさまは
十
ぢゞアさまは
ぢゞアさまの云ふ事を
聞かなくなるであらう。
の後まぢゞアさまは
くよくよしてゐやアせぬ
ぬうちにアヂ
ぢゞアさまは



十日ニ

十

○越スキ地ノ声ニテハ「ソウデアロウモノ
ナラバ」ト云ヒ越後ノ声ニテハ「ソウデアロウモノ
ナラバ」ト云フ此ノ一声ノ内ニ十通リ百通リノ
変化ガアルノデアル

コレモシ居ルノデアロウカ

ソウデアロウモノナラバ

ソウデアロウモノナラバ

ソウデアロウモノナラバ

のこうへ
ゆうべ
ねんごろ
ねもころ
ねんごろ
ねもころ
ねんごろ
ねもころ

十四

むりやりの
おこめ
きょうは
ちゃわんに
おもいもりや
ぐんぐんたべる
ねこの
おおきなまえに
ちゃわんを
おいて

明和八辛卯年六月吉日

此書ハ當世吉原の趣意通り者の仕うちの穴を穿ち

全部 二冊 追刻

綾杉庵 主人 校刻